

# 私の 「スタンドバイミー」

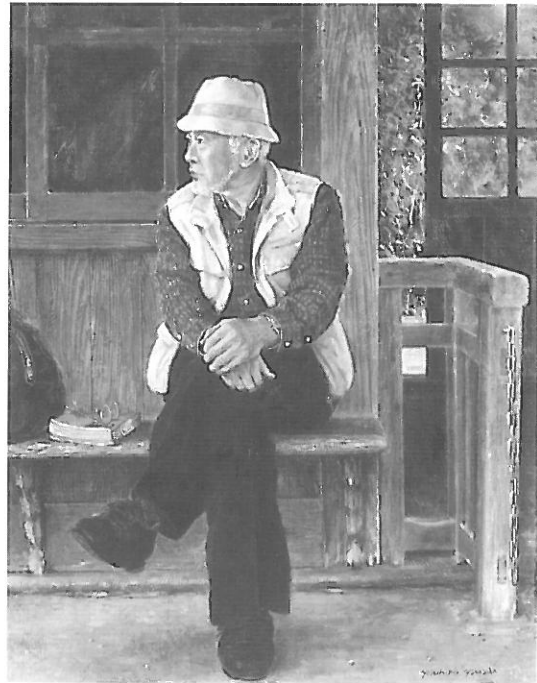
岐阜 山田裕彦

私が二年前の示現会展出品作に「旅」のシリーズを描き始めたことは極く自然であり、いわば必然的といえるかもしれない。旅の仕方はいろいろあるが、私が鉄道の旅に、限らない心の高揚と、ときめきを感じるようになったのは、遠い昔、少年のころに夜のしじまに響いた汽笛の音が今だに心の中に余韻を残すかの如く郷愁を誘うからである。

近年、蒸気機関車が全国のあまたの幹線から姿を消すこととなり、ディーゼル機関車や、電気機関車に置き換えられる時期に、より想いを強くした。

都市と都市を快適に、速く結ぶ新幹線や、特急列車の旅もよいが、時に乗車するローカル線には、ゆっくりと流れる車窓の風景や、人とのふれあいを感じるものが出来る。このような線には、木造の古い駅舎が点在している。明治の頃に造られ、百年を経たものも少なくない。

私が特に好気心を誘われるもののひとつに古い木製の改札口がある。長い年月それぞれの時代の人々の乗り降りゆくさまを見つめ続けてきたその姿は、人の旅立ちや別れに立ち合い、四季の自然の中で刻まれた風化した年輪、乾いた色、傾



▲ 第59回示現会展 旅

いた形に何とも良いあじわいを感じ表現したくなるのである。都会では今や、自動改札となり、そうでなくても鉄製やコンクリート製になったものがほとんどなのか、木製の柵をみるとよくぞ残ったと感激するのである。

五十九回展より「旅」をはじめた。この取材について少しご紹介することになります。



◀ 嘉例川駅



◀ 大畑駅 1



▲ 第60回記念示現会展 旅

熊本県八代と鹿児島県隼人を結ぶ肥薩線に向った。明治の頃は幹線として敷設されたこの鉄道も、現在の鹿児島本線が敷かれてより、山の中のローカル線と降格し、列車本数もまばらとなったが、これが古い木造駅舎をそのまま残る、私にとっては幸いの鉄道となった。

先に書いた百年を越す駅舎として、嘉例川駅、大隅横川駅、それに準ずる真幸駅、ループ、スイッチバックで有名な大畑駅などが沿線にはある。これらも少し前までは無人駅として粗末に扱われていたが、最近では地域の人たちの意識も変わり大切に保存利用されていることは喜ばしい限りである。

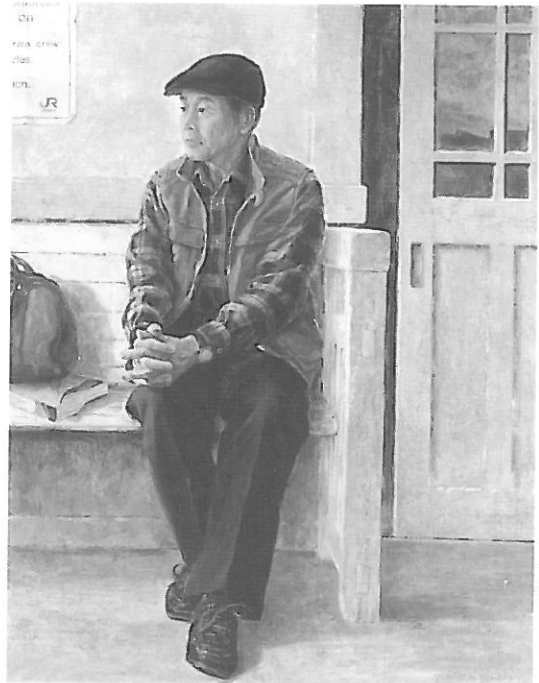
私は旅の途中降りたった駅でしばらく身を置く。それぞれの想いをもって旅をしている人、仕事で、又、生活のため利用する人、様々な人々の光景を見た。

旅への憧れ、知らない土地への興味は誰の心にもあり、人は人生のひと区切りをつけた時、本当の自分の為の旅を始める。ベンチに座り、列車を待つ。その心はまさに「スタンドバイミー」だ。

◀ 大畑駅 2



◀ 大隅横川駅



▲ 第61回示現会展 旅